

理想郷と名づけられた住宅地 三田市フラワータウン、アルカディア21住宅街区

技術⑤

1 - 二十一世紀住宅展

「春夏秋冬、こもごもに移ろう空や遠くの山なみのすがた、まちの広場や通りの樹木や花々、そして、みちや生垣のたたずまい、これらのまちなみはただ美しいだけではなく、住む人にまちへの愛着を与え、大切にし、育てていこうとする心を生みだしてくれます。いわば、良いまちなみづくりはふるさとづくりともいえるのです。ここ二十一世紀住宅地区では、豊かな自然を背景に、石と緑を生かしたまちなみの骨格づくりをすすめ、いままでに例を見ない美しく落ちついたまちなみづくりをめざしました。これからは、ひとつひとつの家がすぐれているだけでなく、家々のまわりの環境やまちなみ、そして、まちへの人々の愛着から生まれるコミュニティのよさが、その住まいの価値を決めていく時代となります。まちなみは住む人たちの資産です。」(二十一世紀住宅展案内文より)

兵庫県は、神戸市北区から三田市にかけての北摂北摂地区に、九つのクラスターから構成される千二百四十ヘクタールに及ぶ神戸三田・国際公園都市、いわゆる北摂ニュータウンを事業展開し、新住宅市街地の整備を進めている。前節でとりあげたウッディタウンは、

その中核をなす六百ヘクタールの開発住宅地(住宅・都市整備公団(当時)が事業主体)であるが、それに先駆けて街びらきをしたのが、兵庫県が事業主体となったフラワータウン(三百四十ヘクタール)である。

兵庫県は、千九百八十八年に、開発の進むこの北摂ニュータウンとこれに隣接する丹波地区において、地域イベント「北摂・丹波の祭典」を開催した。フラワータウンでは、「活気と自由あふれる交流都市」をテーマに、二十一世紀公園都市博覧会を開催し、その公園都市博覧会において、「二十一世紀住宅展」を開催し、来るべき二十一世紀に求められる住環境のあり方、街づくりや家づくりの手法を実物展示した。冒頭の文章は、その二十一世紀住宅展の案内文である。

兵庫県住宅供給公社から、「二十一世紀住宅展」の住宅街区の計画・設計と住宅の環境コーディネートを依頼されたわれわれは、前節で述べた<居住環境街区>の考えを導入し、この場所にふさわしい形での展開を考えた。公園都市博覧会後は、街区の全体を分譲し、実際に住んでもらおうという企画でもある。事業的には、兵庫県住宅供給公社が

街区の整備と街なみ基本外構(一次外構)の整備をおこない、住宅メーカーや工務店によって、住宅と、街なみ外構につきあう二次外構の整備を連動的に行い、共同分譲事業として全体を供給するというものであった。

2 - 石と緑の居住環境街区

そういった経緯のなかで、ここでは、まさに、環境骨格としての公園を中央に持つ居住環境街区を構想した。安全でヒューマン、時代に耐えうる本物の素材による居住区域道路、築山樹林に囲まれたナチュラルコモンと呼ぶ芝生広場、そして、街なみ共通外構、これらが内包された「北摂庭園型居住環境街区」である。

想定された敷地規模はゆったりとしており、余裕があったので、周辺をも含めた街づくりに寄与するため、ここでは各々の敷地をいっぱい利用するのではなく、それぞれが供出した土地を街区中央にまとめ、築山樹林に囲まれたやさしく曲線的でナチュラルな芝生広場を作った。芝生広場はナチュラルコモンと言っているように、住民の共有地であり、住民によって管理されているが、地域に開放され、一般市民が自由に使える空間になっている。個々の住宅とこの芝生広場の間の道路は公共に移管される道路となっており、公道をはさんで共有のスペースがあるという極めて目珍しいかたちとなった。



図1 コケの生えたピンコロ擁壁と住み手によって植えられた可愛い花



図2 住民管理のナチュラルコモンで、芝生の上をころげまわって遊ぶ子供たち

公共移管された道路は、幅員二Mの路地、四Mの歩行者専用道路（図15）、六Mの居住区域道路（図6, 8, 10）からなっている。幅員四M、六Mの道路については、その中に適宜中木を植え、閉じつつ開いた空間意識の感じられる、つまり、領域性の高い生活空間としての道とした。各戸の玄関前のスペースや芝生広場のエントランス部分も、道路に開かれたアルコーブ状になっており、連続した空地空間を目指した。

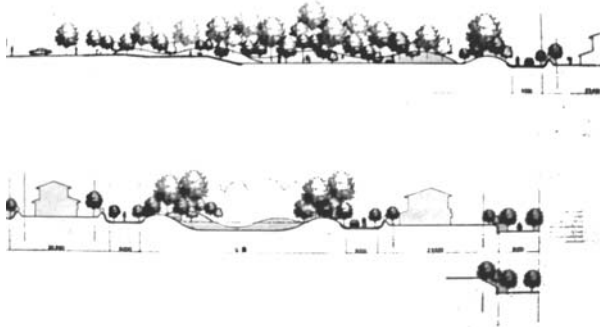


図3 柔らかなアンジュレーションのナチュラルコモン

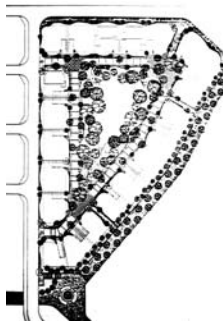


図4 21戸で囲まれたナチュラルコモンを持つアルカディア21住宅街区



図5 街区内へのアプローチ歩道にも木が植えられる

3 - 中間領域の構造化

道路のような公共部分を<公>、敷地内の住民専用の部分を<私>としたとき、その分かれ目、つまり敷地の境界領域の部分であったり、道路からよく見える部分を、<公>と<私>の中間の部分、<中間領域>と言う。この中間領域を骨格構造的にしつらえることが、良好な街なみづくりには効果的だ。ここでは、中間領域の構造化として、公共移管する道路と民地の擁壁、アルコーブ状のア

プローチの前庭、共有の公園の低い擁壁、広場といったもののすべてが一体となった地域環境となるべく計画した。環境的に<公>と<私>の境界をなくすこと、<私>と<私>の境界もなるべくなくして連続させることに力を注いだ。街角や長い擁壁の中間部分、宅地と宅地の間では、宅地内で擁壁をセットバックさせ、道路レベルに中高木の植栽を施した。アプローチ部分にあっては、隣の住戸の擁壁がセットバックしているために、自分の家のためにように中木が植えられている。こうしたことはちょっと普通では考えられないことだが、全てがそうになっているのだからお互い様なのである。宅地のコーナー部分も同様になっており、街区内のみちがすべて自分たちの場所、<協空間>であることが、実際に実現し住むことによって、住民には理解される。



図6 左にナチュラルコモンの木々を見る街区内の道路



図7 美しい影が映えるデザイン



図8 早朝の樹影の中を歩く通学生



図9 築山樹林に囲まれたナチュラルコモン
はてな形の石の椅子は彫刻家関根伸夫作



図10 時間とともに移り行く影もデザインの大きな要素



図11 住宅の敷地内も道路レベルでセットバック



図12 街角も敷地内で擁壁をセットバック

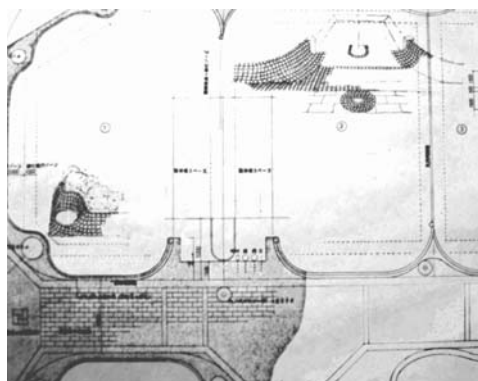


図13 平面的にもうねって連続するデザイン

4 - 石を連続的に使う

構造的な連続感を強調するように、ここでは環境骨格としての形をすべて、柔らかく、大きくうねった曲線にして、宅地の擁壁と道路もひとつの曲線で連続した断面とした(図10,15)。擁壁と道路の使用材料は同じ素材、桜色の暖かい質感の御影石で、九十ミリの立方体状のピンコロと、四〇〇ミリ×八〇〇ミリで厚さ一〇〇ミリの平板に使い分けている。石はそれ自身、すでに長い年月を経てきた歴史を持っているし、ピンコロは、特に割った肌の部分が一樣にはならず、偶然性の自然な感じがあるので、手技の適度な不揃いと相まって、柔らかで気持ちよい質感を呈する。長い年月を支える環境づくりには格好の素材である。一般には、〈公〉と〈私〉の境界を分断することになる排水溝も、全てピンコロ舗装の下部に見えないように設けた。道路は公共移管されるので、もちろん維持管理ができるようになっているし、公私の境界も実は線状の目地で分かれているが、境界があるようには見えないのである。排水溝上のピンコロを敷いた蓋の部分は、工場で石を埋め込んで作って来るのだが、現地で敷き並べていくものと同じような感じに仕上げることが、実はとても難しかった。何度もやり直し、方法を変え、ようやく目指したものになった。

ピンコロ石の擁壁には少し勾配がつけてあり、擁壁上の2段植栽の足元からたれて茂るつたが、季節ごとに異なった表情を見せる。擁壁の目地には、その勾配のゆえに時間が経過するにつれてコケが生えてくる。硬い石もピンコロ状にして曲線状に積めば柔らかい雰囲気にもなり、コケが生えればさらに柔らかさを増す。車止めも、同じ桜御影石を削りだしてつくっている。ここでは、〈公〉と〈私〉の中間領域化が、空間的にも素材的にも、環境構造としての一体化として実現しているのである。

気持ちの良い街なみを形成するためには、自然の変化を敏感に受けとめ、表情として見せるような素材の選び方、使い方が重要だ。例えば、影。時間と共に移ろい、四季の中で濃淡をつくる影、影をきれいに映しだすような質感、素材感にこだわった。その他、雨に濡れた時の様、枯れ葉の落ちた様、歩く人や遊ぶ子供たちの背景としての様、そういった様を思い描きながら、素材や使い方を考えた。



図14 傾斜した擁壁にはコケが生える

5 - 固定資産税の減免

アルカディア21で特筆すべきことは、街区中央の、一般に開放された住民共有、住民管理のナチュラルコモンについて、三田市がその公共性を評価して、固定資産税の減免を行っていることである。それも、実態に即して何度かの見直しが行われ、減免率が大きくなっていったことである。住民にとってはお荷物ともなりかねないこの共有の公園が、地域にとっての愛着ある場となり、したがって住民にとっても誇りうる場となっていくことのサポートになっており、公共移管か否かといった二者選択を越えた、新しい可能性が示されたことは意義のあることである。まさしく、地域の環境がソフト・ハードの両面から構造化されていると言えよう (図17)。



図16 移り行く影の美しい築山芝生

6 - 理想郷と名づけられた住宅街

「テクノロジーが長足の進歩を見せるなか、私たちはこれからの街づくりや家づくりをメカニカルなものに求めるのではなく、最新のテクノロジーの成果をふんだんに採り入れながらも、人にやさしく潤いのある、そして暮らしそのものが愉しくなるような住空間「石と緑の庭園街」をつくりました。時代はどんなに変わろうと、人もまた自然の一部である以上、大地や緑や花や鳥とゆったり仲良く暮らす未来こそ理想です。そんな願いをこめて「アルカディア21」と名づけました。」アルカディアとは、古代ギリシャ山間の牧歌的田園のことで、純朴・平和な理想郷を意味している。



図17 一般市民にも開放されている住民共有の庭



図15 道路・側溝・擁壁が連続し公私の境界が消されている

アルカディア21住宅街区 1987年

兵庫県三田市弥生が丘 (フラワータウン内)

敷地面積: 13,635 m² 戸数: 21 戸

掲載紙: 『都市環境デザイン』学芸出版社

『住宅の近未来像』学芸出版社

『都市環境デザインの仕事』学芸出版社

家とまちなみ 0209